河上肇記念会報

NO. 21
1985・9・1

一九八五年度総会御案内

酷しい残暑もようやく過ぎました。恒例の本会総会のご案内をお知らせいたします。

今年は丁度河上誕生の一〇月二〇日が日曜日に当り、その日を総会開催日にあてることにいたしました。講師には京都大学文学部教授の松尾尊兊氏をお招きし、「佐々木惣一と河上肇」と題して、京大時代から終生、親交の深い二人についてご講演を頂く予定です。

多数ご参会下さるようお願い申し上げます。

一、日時　一九八五年一〇月二〇日（日）
　　午前一一時～午後三時

一、場所　法然院
　　（京都市左京区鹿谷御所ノ段町二四）
　　会場案内図（九ページ）参照

一、臨時会費　四、〇〇〇円（会場費、昼食費を含む）

同封ハガキにて一〇月九日までに出欠のご返事を賜わりますようお願いします。（お手数ですが四〇円切手を貼って下さい）。

目次

一九八五年度総会御案内 …… (1)
河上肇の「貧乏物語」と私 …… 小谷　正守 (2)
「貧乏物語百読会」岩国紀行 …… 沖本　彰 (4)
岩国の河上肇旧宅をたずねて（承前） 脇　英夫 (7)
『東京河上会会報』に関する二、三の感想 …… 米浜　泰英 (10)
会員通信 …… (18)
資料・『上田敏詩抄』 …… (29)
アンケート集計報告 …… (30)
総会場案内図(9)・編集後記(32)

河上肇の「貧乏物語」と私

小谷正守

河上肇という名前を知ったのは、高校のときで「貧乏物語」という岩波文庫を手にしたときからである。当時、私は高校の社会科の先生の影響もあって経済（学）に関心をもち、宮川実「経済学入門」も読んだ。経済に関心を抱いたもう一つの理由は、私が育った家庭は貧乏であった。六人兄弟（姉妹）の上から四番目で、男は兄と私の他は女であった。父は山陰の農家の生れで長男であったが、父の代にはすでに財産はなく、とても苦労していた。私は、子供心でもこのことは身にしみていた。父母はとても働き者であった。父は、こういう家庭環境のもとで、私に話したことは、世代交替のときの家運によって人は随分その人の生き方が異なるものだ、家運が傾いているからといって引継ぎを拒否するわけにもいかない、しかし家庭が貧乏だからといってそれが恥であったり辱しいことではないが、だからといって自慢にはならないが……、といっていた。こういった父の話しが当時も今も頭にやきついて離れず、学生時代、私も随分経済的に苦労した。初めて古本屋で河上の「貧乏物語」を手にして、冒頭の書き出しを読んで驚き、感激し、かつ安心したのは「なんと今日の文明国に貧乏人の多いことか」という内容であった。しかも、日本だけでなく英米独仏においてもこのことは同じであるというので、これまた安心した。端的にいえば、当時の私の頭に入ってきた河上の考え方が、そのまま、私の家庭の貧乏という個別的事情が、個別的事情ではなく、大部分の人々が貧乏の環境にあるということだった。しかも貧乏人の同志の多いことも知って、経済学に関心が高まり、益々興味を抱くようになり、結局そういう経緯を経て今日に至っている。私流の経済学は、従って河上肇の「貧乏物語」が導きの糸となったのである。宮川実「経済学入門」（昭和24～

25年頃の本で紙質の悪いボロボロの古本であった）も、その頃読んで大変興味を覚えた。

大学では、マルクスの「経済原論」をこの会の代表世話人であり、私の恩師である杉原四郎先生に学んだ。語りかけるように、そして時には語義を強調して説得的にもの静かに講義される先生の姿を今も頭に残っている。そのときの講義のノートもよく整理していた。河上記念会で、再び先生の下での会員になっていることを大変光栄に思っています。

かつて、私は関西経済同友会に勤務したのですが、その時に私が知った財界の方で、川勝傳先生（南海電鉄）がおられ、会報19号、で川勝先生の「河上先生、その門下生との出会い」の講演記事を読み、これ又大変心を打たれました。当日配付された先生の著書「反骨と友愛」を是非入手したいと思い、直訴で書簡を差上げましたところ、著書と心のともったお手紙を付して送付下さり恐縮した次第でした。この著書からも多くを学びました。私の勤める大学で、数年前、卒業式に「君が代」と「日の丸」が教授会で、歌うか否か、掲揚すべきか否かで6時間余の激論があった。そのとき、多くの議論が白熱し、藤間生大教授はいずれも卒業式には不用という意見でした。しかし、結論は、日の丸のみ掲揚ということになった。川勝先生は、君が代も日の丸もいずれも根拠のあいまいなものであり、国歌や国旗が正式に必要なら新しく制定してはどうかということをきっぱりと、この著書の中でいっておられます。この会報の№19に宇都宮徳馬先生の「今日の情勢と軍備―危機の時代と河上精神」の講演のなかに「真理をいうときは多少命がけにならなければならない」（13頁）という言葉がありますが、今の時代に大変重要な意味をもっていると思います。

河上肇が、今日この時代にこうした多くの人びとに愛され思慕され、その思想を受け継がれていくのは、そこに真理があり、貧困や権力による圧迫から自由や平等や博愛を追究して止まない人間性があったからにほかならないと思います。河上肇全集が幸にして公刊され、多くの人びとの努力によって完成に近づいておりますが、大変意義の深いことでもあり、沢山の人びとに読んでいただきたいし、私もそうしたいと念ずる今日此の頃であります。

（熊本商科大学）

「貧乏物語音読会」岩国紀行

沖本　彰

「貧乏物語音読会」では発会五周年を記念して四月六、七日の両日、河上肇博士の故郷岩国を訪れ旧跡めぐりをしました。

塩田庄兵衛先生を団長とする総勢32人の旅行団は、四月六日午前八時三六分ひかり93号で京都を出発、途中広島で下車、定期観光バスで平和公園、原爆ドーム、原爆資料館等の旧市内を見学し、「核兵器廃絶」の誓いを新たにした後、電車で岩国に向いました。

午後五時すぎ岩国に到着、タクシーにて錦帯橋近くの「半月庵」へ。この「半月庵」は古い武家屋敷を改造した国民宿舎で、岩国出身の作家、宇野千代さんのお気に入りとか。当夜は、河上博士の甥御の河上荘吾さん（画家左京氏の長男）と岩国平和委員会の吉岡光則先生（岩陽高校）にわざわざ「半月庵」までご足労を願い、河上さんには博士の思い出話を、吉岡先生には岩国の米軍基地の実態を話していただき、夕食をとりながら親しく懇談しました。夕食後は、各自思い思いに桜の名所、錦帯橋附近で満開の夜桜を楽しみ、静かな岩国の一夜を過しました。

翌七日は生憎と雨でしたが、早い人は朝六時頃起きて錦帯橋を渡り、横山という所にある吉川公六万石の屋敷跡等の史跡をめぐり、岩国についての認識を深めました。――岩国の町の概略については「自叙伝」（岩波全集続五巻P20～25。以下引用ページ数は、全集続五巻による）に詳述されています。――

午前九時に「半月庵」を出発。雨の中を荘吾氏の案内役で先づ長久寺小路にある河上家の菩提寺・仏住山長久寺にお詣りしました。お寺では、すでに住職代理の八百谷法久師が法要の準備をして待っておられ、全員着席して法華経の読経がはじめられました。そしてみんなで焼

香を終え、博士の戒名、天心院精進日曜居士をつけられたのは先々代の住職であったこと等の話をうけたまわりました。この長久寺は顕本法華宗（本山は岩倉妙満寺）の寺で、河上家の過去帳があり寛永～元禄間の記録が残っていることと（P37）、また、幼年時代に祖母につれられて自由民権の演説を聞きにこの寺に来たこと（P112）が「自叙伝」に記されています。

長久寺を後にして、旧城下町の狭い小路を幾つか通り抜け町の中心近くにある岩国学校へ。ここには、旧校舎の中にこの地方の昔からの農具や民具、そして昔の教科書や岩国関係の書籍や有名人の肖像が陳列されていて、岩国の歴史を実物で知ることができます。（P132～136参照）陳列の中に博士の著作と共に「音読会」の案内パンフを発見し一同大喜びしました。

岩国学校から北東へ約三百米歩き、妙覚院（母方の菩提寺）の門を入るとすぐ右手に河上博士の母乳を呑んだお地蔵様が見えました。（P108）左手に行くと母方の祖父又三郎氏の墓があり、表には「霜松河上君之墓」と刻れています。妙覚院のことは「自叙伝」P125～128に又三郎氏のことと関連して詳しく書かれていますが、その中に出てくる金色の「天女」を見たい方が多くありました

左より２人目　河上荘吾氏
３人目　塩田庄兵衛先生（立命大）　　1985. 4. 7 河上邸にて

ので、住職の星出覚真師は外出中でしたが娘さんにお願いして本堂に上り、極彩色で鮮やかに天井を舞っている「天女」を見せてもらいました。妙覚院を出て国道二号線を横切ると普済寺という曹洞宗のお寺があり、ここに河上家の墓があります。参加者一同墓前に花を供えて合掌。正面は父・忠氏の墓、左手に「河上肇墓」（左側面に大正十五年九月十一日没、男政男享年二十四。昭和四十一年二月十日没、秀享年八十二と刻まれている。）そして右手には弟、左京氏の墓が並んでいます。

墓参をすませて、古い家並の続く小路を通り、メインストリートである新小路を横切って散策（さんさく）という所にある河上肇生誕の家へ。この家は河上荘吾氏のご一家が住んでおられ、荘吾氏の奥さん、ご長女、そして荘吾氏のお姉さん（すなわち博士の姪御）が、部屋をきれいに掃除され、博士自筆の詩や歌を床の間に飾り、屏風を立て待っておられました。一同大いに感謝、感激。この屋敷のことは「自叙伝」P49～50、P110～111に書かれていますが、私たちは家の中をこまかく見せていただき荘吾氏とお家族の方を囲み、岩国民商会員の郷食品で作られた弁当をいただきながら、いろいろな質問をしたり感想を述べたりして、和やかに懇談しました。私たちは博士の生れたその場所で、血のつながる方達と話合い、食事を共にした感激を胸に、立ち去り難い思いを残して、午後一時すぎに河上家の人々にお暇乞いを致しました。

その後、岩国市営の貸切バスで米軍基地が一望できる尾津の丘に登り、さらに基地を一周して、再び城下町にもどり吉香公園近辺を散策し、新岩国より新幹線に乗車、無事京都に帰りつきました。時に四月七日午後七時三十分。

（以上）

▲岩国の生家（岩国市講見）

岩国の河上肇旧宅をたずねて（承前）

脇　英夫

河上肇旧宅といえるものは、すくなくとも二箇所――岩国と京都――を数えることができる。京都市左京区吉田のそれは、我国の近代史上に残る論文、著述の数々を生産された書斎の所在所として、日本近代社会思想史上の記念物である。一方岩国のそれは、河上肇という人物を育くんだ家として、人間河上肇が終生忘れること無かった場所である。河上先生の終生にわたる、旧宅と故郷への強い愛着は、『自叙伝』Ⅰ、幼年時代・少年時代中の随所に、うかがわれる。

岩国市は工業都市で戦災も受けたが、先生が幼時を過した侍屋敷、錦見（にしみ）は工場地帯をはるか離れていて、戦災はまぬかれた。特に河上宅は、往年の姿を残していると聞いて、私はかねてからの訪問の希望を、知人を介して、現在の居住者で先生の甥にあたる河上荘吾氏（次弟左京氏息）に伝えていただき、幸い快諾を得たのである。去る七月某日霖雨の中を、友人二名と共に訪問したのである。

旧宅のある錦見は旧吉川藩、中下級武士の住んだ屋敷町で、錦川左岸、日本三奇橋の一つ錦帯橋の下流三〇〇メートル位の処に旧宅は位置する。この一帯には現代風の建物もあるが、旧宅は板塀をめぐらし、瓦屋根付門を備えた昔さながらの侍屋敷の姿である。「私の屋敷は二屋敷を合併したものである。明治八年七月四日東隣りの宅地をそこに新築された家屋と共に買取ったからである。」と『自叙伝』にしるされている。（世界評論社版Ⅰ、一三頁）

私たちは門から入って、正面玄関風の右側にある格子戸を開き土間に立って、案内を乞い、荘吾氏に迎えられ、中の間を経て座敷に通された。荘吾氏は私たちの来意にこたえて、懇切な説明をして下さった。また平素は奥に

しまっておられる、河上先生関係の記念品も、特に出して見せて戴いた。それらはすべて私たちには大へん印象深く拝見したが、ここでは割愛して、旧宅の様様に限って報告しよう。

座敷の床には、河上先生三行書軸、鴨居には左京画伯の作品の風景画等、また室の一隅には河上先生が母堂喜寿の祝に、東京で表具師に調製させて贈られた、書画帖父ぜりの二曲屏風が置かれている。『昭和十三年十一月母上の喜寿を祝して之を作る。』との箱書きのある箱に納めて、岩国に送られてきたという。先生は十一月六日付で、左京氏宛詳細説明を書き送っている。（『河上肇全集』二六巻二一四―二一七頁）

庭は雄然としているが、純日本式庭園である。もと肇誕生記念と第暢輔誕生記念に植えられたケヤキ二株あったのが、余り繁茂したので、先年伐採されたとか。また古い、三葉の松一株は珍るしい。

さてこの住宅は自叙伝にもあるように、二つの住宅を合せて建てられたもので、その上なお後年母堂の静養室など建増されているので、かなり大きく、屋根は二棟に分れているが、間取りの詳細などは聞くのは憚かって未詳のままである。写真は幾枚かとらせてもらったがそのうちの一枚に玄関がうつっていた。自叙伝によると、当時も、現在のようにふだんは土間の方から出入していたようだが、何事かあると、左側の幅一間の障子を開いて、式台を経て上っていたようである。誕生間も無くの先生が、乳母に抱かれて、この家に第一歩を印した式台は、現在も減ってはいるものの、障子はガラス戸に変り、カーテンが張られて玄関としては全く使用されていない様様である。（『自叙伝』世界評論社版一一頁参照）

人間誰しも幼少年時代に忘れ難い思い出と愛着を持つことには変りはない。河上先生は自らの幼年時代の所行、性癖などはそのまま学者、思想家としての自己にもあらわれていることを懐かしんでいる。私は先生が士族屋敷で幼少時代を過したことと「どこかしら国家主義的な香気が感ぜられ、同時に経世家らしい風格が偲ばれる」（自叙伝に引用された赤城和彦の河上に対する評語）こととは決して無縁ではないとおもうのである。先生はまた萩松本出身の吉田松陰の強い影響を認めているが、それも先生が岩国や山口で幼少年時代を過したことと無縁ではない。あれこれ考えると岩国の河上肇旧宅は、明かに第一等の河上肇記念物である。

ひるがえって、山口県には歴史的人物の旧宅保存が盛

んであるが、その多くは志士、元勲といわれる、明治維新関係者である。

河上肇は、我国近代史で、大正、昭和のデモクラシー的思想の先導者として巨大な足跡を残した、歴史的人物である。郷里山口県でも、戦前狂気の時代には明かに異端視されていたが、今日では山口県立博物館展示において「山口県百年の先覚者」の一人として河上肇遺品が展示されたように明かに見方は変った。河上肇記念物として第一級のこの旧宅も当然保存措置が講じられてよいのではなかろうか。河上先生がそうであったように、山口県人、岩国人というと、強い郷土愛の持主が多いが、岩国市錦見の一角の河上邸の保存についてもぜひ考慮してもらえないだろうか。――河上邸を辞去するにあたって強く考えざるを得なかった。

表紙解説

大阪朝日新聞の記事。切り抜かれ、裏面には「昭和三年四月十六日共産党事件ニ干係アル京大社会科学研究会ノ指導教授タリシ故ヲ以テ道徳上ノ責任ヲ感ジ辞職」と墨跡あざやかに記録されているが、河上肇の手になるものとは思われない。

総会場法然院案内図

河上肇記念会一〇周年・会報二〇号記念によせて

『東京河上会会報』に関する二、三の感想

米浜泰英

一

東京河上会が正式に設立総会を開いたのは一九六〇年十月二十日、会報の創刊号が出たのはその翌年の十月である。つまり、河上会は安保の年にできたのである。会報のバックナンバーをはじめて眼にしたとき、私はこの会ができたのがそんなにとおい昔ではないことを意外に感じた。

創刊号には、七カ条にわたる東京河上会規約なるものが載っていて、その二番目と三番目とはとくに私の眼を引いた。

「故河上先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人々を会員とする。先生の教えを直接うけたと否とにかかわらず、イデオロギーのいかんを問わない」（第二条）

「この会は、河上先生の人格とその業績をたたえ、これを広く、かつ長く伝えるための研究ならびに事業を行なう」（第三条）

今回、改めてこのなんとなく時代がかった規約の文面に接したとき、私は、一昨年の法然院での法要で、故橋本貫主が集まった人々を前に、皆さんは「河上症候群」だと説教をされ、おおいに座が沸いたという話を思い出した。

創刊当時の会報に登場する人々の顔触れをみていると、二十五年前にはまだこれだけの人々が健在であったのかと思わせる。津田雪楓、細迫兼光、山田勝次郎、藤森成吉、松方二郎、大熊信行、谷口善太郎、大塚金之助、大

塚有章、大内兵衛……。さすがに河上肇と同年代の人は、わずかに津田青楓ぐらいで、やはり、河上門下の人々や後輩として河上を慕った人々が中心である。

しかし、会が結成された一九六〇年には、これらの人々も、もうすでにいいお齢になられていたのである。会報には創刊間もなくから、会員の訃報が載っているが、六〇年代の半ば以降になると訃報と追悼文が毎号のように掲載されるようになった。なかには会報が数人の人の追悼に当てられ、全面追悼号となっているものもある。

二

ところで、私がこの会報を読みはじめたのは、あくまでも河上全集の作業のためであったが、そういう眼でみると、会報のバックナンバーはなんといっても河上資料の宝庫であった。実際、会報ではじめて発掘紹介された論文や書簡等はかなりの数にのぼる。例えば、大正九年の末紀州周辺に滞在中に当地の新聞『紀伊新報』に寄稿した「元旦問答」（脇村義太郎氏紹介）、学生時代に郷土の新聞『長州日報』へ寄稿した一連の文章（脇英夫氏紹介）、岩田義道宛の手紙、山本有三宛の手紙、また山口高等学校時代の成績表（脇英夫氏紹介）等々、これらの大部分は全集の関係者だけではとても手の届かないであろうと思われるものであった。

また、会報にヒントが与えられているお蔭で、新しい資料が見つかったケースもある。大塚金之助「河上先生の本を焼くの記」（5号）には、東独の国立図書館に寄贈した大塚の蔵書のうち、河上肇の著作一覧が載っている。そのなかに「手紙（大塚あてのもの）」という一項があったために、方々に頼んでおいたところ、向こうに留学中の方を通じて、海の彼方から河上書簡が届けられるという幸運なケースもあった。

上記のような河上の第一次資料とは別に、野口雅氏の「河上肇先生文献志の岩干の補遺」（七回連載）、天野敬太郎氏の「河上肇文献志昭和40～48年秋」などは、私たちにはもっともありがたいものであった。このような仕事は、その性格からして完璧を期しがたいうえに、作業の方は根気のいるものであるため、すすんで手掛けようとする人は少ないのである。

三

以下はきわめて私的な感想になってしまうが、会報を読んでいると、これは、と思うような人が登場すること

がある。津田青楓もその一人である。大正十三年に京都で知りあった二人が、絵画会の集まりをつくって、きわめて親しい関係を結んできたことはよく知られている。河上の側の心酔ぶりは、書簡にもっともよく表われているが（全集24・25巻参照）、二人の交友関係は、河上が獄に入っているときも出獄後もかわることなく続いた。ところが、昭和十六年の末、東京から京都に移転する際に、彼は青楓ときわめて気まずい別れ方をしてしまった。そして、その後に執筆された『自叙伝』「思い出・断腸の部」の「お嬢と七種粥」のなかでは、青楓にまつわる気まずい思い出話が、きわめて辛辣な筆致で記されるのである。

出獄後間もない頃、河上は青楓の家に招かれて食事の饗応を受けたが、青楓一家の女中に対する横暴な態度にひどい不快を味い、出された七種粥に対してもケチをつける。

「……私はかうした雰囲気に包まれて、眼を開けて居られないほどの不快と憂鬱を味った。

私は先きに、人間は人情を食べる動物であると云った。かうした雰囲気の裡に在っては、どんな結構な御馳走でも、おいしく頂かれるものではない。しかし私はともかく箸を取って、供された七種粥を食べた。浅ましい話をするが、しゃれた香の物以外に、おかずとしては何も食べるものがなかったので、食いしんぼうの私は索然として箸をおいた。」

青楓は、戦後間もなく出版された『自叙伝』でこれを読んでいる筈である。会報に載っている、河上会に招かれて青楓がしゃべった話は、はたして直接それに触れたものであった。

「大体、彼は食いしんぼうのほうで、自叙伝のなかでも、「まんじゅうが食いたい」などといっています。しかし、彼は食いしんぼうではあっても、舌の感覚が優れているという人ではなかった。」

書いたものとはちがって、談話の記録であるだけに、かえって話し手の口吻が伝わってくるようである。ただ、『自叙伝』と青楓の話との間には多少のズレがあり、『自叙伝』では青楓の家に招かれたというのが、麻布のおきつ庵という所へ招待した、という話になっているし、「七種粥」もこちらは「八方めし」となっている。

「それはおいしいだし汁を沢山作っておき、鳥とか、鯛とか、野菜などいろいろのものをこまかくきざんで、飯の上にのせて、それに作っておいただし

汁をかけてたべる茶漬めしだった。これが有名だったので、私の家内が河上君を連れて食べにいったことがあった。

ところが、河上にいわせると「津田の家では、わしにはもっとどち走を食はせねばならないはづだ。ところが津田は、わしにおかゆを食はせた。」と奥さんにも廻りの人々にも盛んに憤がいしてしゃべったらしい。……しかし、釈明しようにも河上はすでに死んでしまっている。」

同世代の人間のこういう発言は会報全体を通じて、ほかには見当らない。しかし、この記録を読むと、会報が創刊された頃には、『自叙伝』が人間関係をめぐって生ま生ましい対話が行なわれている生きた作品であることがわかる。

会報を読んでいて、これは、と思うようないまひとつの例として、河上に実刊五年の有罪判決を下した当時の裁判長藤井五一郎が、東京河上会に招かれて発言している記録がある（14号）。親く側にあった人間が、戦後こういう会に出てきた上、当時からずっと河上先生の人格と学問に敬慕の念を抱いていたと発言しているのも面白いが、一方で、河上も藤井については、その人柄の誠実さと河上個人に対する親切な態度に感謝しており、『自叙伝』のなかでもきわめて好意的に記述されている。これなどは思想信条を越えて心が通い合った、美しい関係の記録として、『自叙伝』のなかでは少ない方の例に属するであろう。

四

会報からすこし話がそれてしまうが、『自叙伝』を読んでいると、かつての友人や同志に対する忌憚のない批判が強く印象に残る。『自叙伝』を書いているときも交際を続けている古い友人に対してすら、ひとたび彼を文章のなかに登場させると、その攻撃力はいささかもゆるまないのである。なぜ、こうまで激しくかつての友人や同志を批判しなければならないのか？

この疑問は、『自叙伝』を読んでいれば誰しも起る疑問であろう。これについては、『自叙伝』を執筆したいくつかの動機や当時の感情が複雑に絡みあってくるわけであるが、ここはそれを議論する場でもない。

ただ、そのような内容となってしまった『自叙伝』を、関係者への配慮と世間への公表という点から、その処置

に関して明確に言及した一文が残っているので、次に紹介したい。以下の引用は、昭和十四年二月に「入獄記」という草稿の冒頭に付した序の一節である。

「この書は他人に見せるために書いたものではない。もしそを刊行する企がいつか為されるやうな事があるならば、その際書中の記事が他人に迷惑を及ぼしはしないかが第一に考慮せらるる事を希望する。誰も迷惑する気遣が無くなってからでなければ、此の書は陽の目を見すべきものではない。」

書いたものの扱いに関する筆者の意志は、この時点ではきわめて明瞭である。彼は『自叙伝』の公表を自分の在世中はおろか、死後相当先の将来に予想していたのであろう。このような作品がひとたび公表された場合、活字のもつ影響力、破壊力がどれ程のものであるかということは長い年月を文筆に携ってきた彼が、誰よりもよく承知していたことであろう。

それでは、当初このようにはっきりと公刊の条件が明示されていた『自叙伝』が、彼の死の直後、関係者の大半が健在である時期にそのすべてが公刊されてしまったのは、どうしてであろうか？　これもまた、『自叙伝』に関して興味深い問題のひとつであり、『自叙伝』にまつわる「悲劇」は、すべてこの「早すぎた」公刊によっているのではないか、と私は思っている。

話がわき道にそれたので、再び会報に返らなければならない。33号には、獄中の岩田義道に宛てた河上の書簡が紹介されている。『自叙伝』のなかでは、岩田は虐殺される前にスパイに顔落していたのではないかと疑われている人である。

34号には、淡徳三郎の「河上博士と岩田義道」が掲載され、『自叙伝』の岩田に対する疑惑は、まったく河上の誤解にもとずくものであった、ということを友人の立場から主張しようとした。ところが、終りの方にくると、岩田の側にも河上から疑がわれて仕方のないような面があった、という論旨にかわっていく。

「……岩田は、余りに博士と親しかったせいか少し博士に甘えすぎたのではないだろうか。彼は当然の権利ででもあるかのような顔をして余りにも遠慮なしに博士にいろいろなことを要求しすぎたのではあるまいか。それが几帳面な博士のカンにさわったのかも知れない。」

このような伝聞とも、推測ともとれる書き方をしたず

え、「私は、すべては博士の誤解によるものだと思っているが、しかし誤解を呼起すような原因が、岩田になかったとはいいきれない。」と結んでいる。

友人岩田の身の潔白を証明しようという目的で書かれた淡の文章は、おわりの方にきて急に『自叙伝』の記述にも顔を立てようとしたために、なんとも脈切れのわるいものに終っているのである。

次号には、はたして、岩田夫人である阿部淑子氏の激しい反論の投書が載っている。

「淡氏論文「河上博士と岩田義道」には各処に理論的、階級的、人間的、道徳的に極めて深刻な誤りと歪曲が認められます。一口で言うと、まだその根源もはっきり追究、分析もされていない先生の〝岩田観〟の文章を神聖不可侵視絶対視し、それに辻つまを合わせるために、……京大以来死ぬまで先生に甘えすぎたとか、要求しすぎた、更には他人を利用しようとする性格的なものが彼にはあったとか、「〈左翼運動者は人を利用しようとばかり考えている〉という述懐を私も博士の口から幾度かきいたことがある」とまで言われています。事実先生がそんなことを言われたのか、又その代表的人物が岩田であるのか、又淡氏以外の何人がそれに等しいことでも聞かれたのか」

と怒りをぶちまけられている。『自叙伝』によって、スパイという黒い烙印を押された地下の夫にかわって、なんとしてもその汚名を雪がなければならないと思い続けてこられた阿部氏は、これを機に会報誌上で岩田問題を討論してほしいと申し出た。しかし、この提案に対して会報編集部は、岩田論は会報には不向きである、という理由で拒否した。

河上会が河上以外の別の人間を議題にとりあげて討論をしなければならない、という義務はないかもしれない。しかし、岩田問題は、もともと河上の『自叙伝』に発しているのである。一人の人間が官憲のスパイになったかどうか、という事実の当否は、津田青楓の盗い物の話などとちがって、関係者にとってはきわめて深刻な問題である。会報編集部や幹事さんたちも、これはやはりシンドイ問題であり、へたをすれば会員間の意見の対立まで起しかねない、と考えたのかもしれない。この問題はそれきり打ち切られた。

しかし、『自叙伝』に書かれた内容に対して、これほど鋭角的な問題提起がなされているのは、会報全体をと

おして、ほかには見当らないのである。私は、せっかくのチャンスが逸されてしまったことを残念に思わないではいられなかった。

この種の問題がこの種の会で、どのような対処の仕方がなされるかということは、私はその会を占う試金石であると思っている。もし、河上会が、河上肇の批判や否定につながるような意見を極力排除し、河上についてよき思い出をもつ人や彼の人格を崇拝する人々だけで維持されていくとすれば、会は、ますます狭いサロンになっていくであろう。それは会全体が文字どおり「河上症候群」となっていく道である。

五

この数年、河上会の会合がある度に、新しい若い人を会員に、ということばが必ずどなたかから発せられる。たしかに、自発的に入会したと思われるような若い人はあまり見当らないところからみても、若い世代を魅きつけるような魅力は、もはや会には存在しないのであろうか。たしかに、冒頭に紹介した会則の文面をみたら、私の世代の人間なら必ず古色蒼然とした印象をうけるであろうし、岩田問題に対する対処のしかたをみても、「古いなあ」という印象が先にたってしまう。

しかも、そのような世代感覚の相違だけではない。河上肇と長年親交を結んで、生ま身の河上についても彼の学問についても魅力ある話が聴ける、というような人々も次第に少なくなってきているように思う。

こういうところへ来てしまっているときに、従来どおりのやり方で河上会を存続させていくことはなかなか困難なことであろう。しかし、それでもなお、河上会を存続させていこうとするならば、ひとつの試みとして私は、河上肇をうんと相対化してしまうことが必要ではないかと思う。河上に敵対的な人や批判的な人は排除する、というような考え方では、もはやどうにもならないであろう。『自叙伝』で批判されたような人々も、いまはその大半が亡くなってしまったが、政治的立場を異にした人や河上学説に批判をもつ人はまだまだ相当いるはずである。（因に、昨年学士会館で開かれた『京都帝国大学学生運動史』の出版記念会には、河上から解党派として批判されているような人々も来ていたが、そうした人たちの話も私にはなかなか興味深いものがあった。）そのような人々を河上会に招いて、討論会のようなことをやってみてもいいのではないかと思う。

一方でまた、河上肇に本気で関心をもっていて、彼の著作を広く深く読んでいるような研究者――実際そう多くはいないであろうが――を捜し出してくることも必要である。河上肇とは関係のない時事問題が会の主要報告となり、会報の誌面を埋めたりしては、結局は会を風化させていく原因にもなろう。

やはり、河上会の主要議題はどういう形であれ、河上肇に即することが必要であろう。そして、河上を徹底的にたたく人や弁護する人が出てきて、討論が成立するならば、もうそれで十分成功と云えるであろう。

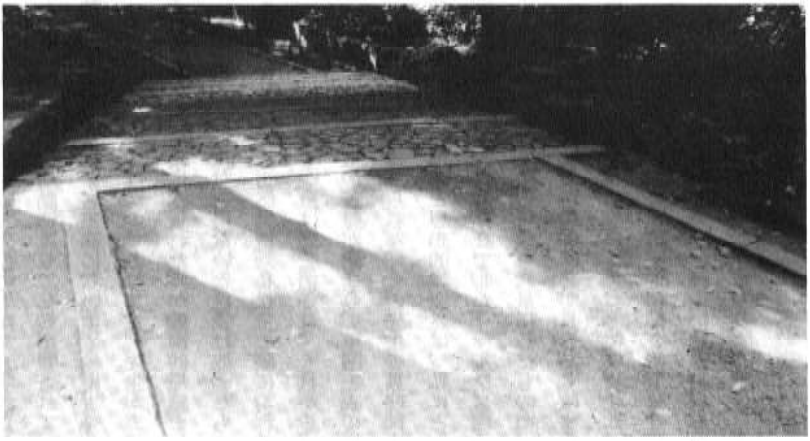
一徑老杉暗く　露凝りて莓苔滋し

一海知義著　河上肇詩注　岩波書店

一六七～一六九ページ「全集」第二一巻

一二〇ページ

（下図説明）



会員通信

（一）

二月一二日、仕事の都合で蔵前に参って来ました。昨年にくらべ梅の花が多く咲いていました。

吹田市　八木　隆

六月、学生たちの調査実習で京都へ出かける予定です。法然院を学生たちと一緒に訪ねたいと考えております。

八王子　島田修一

河上会の皆さまが、皆ご長命で結構です。私はたったの七四才で（明治四三年六月五日）の青二才です。これから頑張って自序（叙？）伝でも書こうかと思います。七〇才をこえますと何とはなしに自分の過去をふりかえりたいと思います。

宇治市　島　恭彦

心臓病その他多くの病魔と同居している現状です。それでいて現役の地位にあるので、救いようのない窮状で、お役に立てないのが残念。

東京都　高木右門

東京河上会事務局長の藤原です。この三月一六日に白石凡氏の一周忌が元朝日新聞社の小ホールで開かれました。

東京都　藤原良雄

（二）河上精神

河上肇先生はなつかしい人です。とは言ってもお逢いしたこともないので、こんな言い方はおかしいかも知れない。先生のマルクス学者としての活動により、私も影響されて、マルクス主義に若いエネルギーをぶっつけたのであります。先生が実践活動に入られたのが理論的帰結として止むを得ないとは受け取ったものの、当然論壇（私たちの眼にふれる場）からは姿を消され、それからは先生の苦難が始まり、軍国主義の犠牲になられた。その先生の真理探求の情熱と思想的誠実さは、私にとって大きな存在でした。マルクス理論が当時の時代を背景にしたもので、現在の時代には必ずしもあてはまらないと思うようになっていますが、それでも私が反骨精神を持ち続けていられるのは、先生に影響されたからだと思っているのです。

長岡市　相沢芳郎

河上先生への敬愛の気持が行間に溢れている会員の文章をみることが喜びです。

神戸市　葉　抱　武三郎

私は河上会の一番左のはしっこについておる市井の一老人です。最近の内外における軍拡風潮に憤りを覚え、危機感をもっております。今こそ河上精神をと思います。昨日はまた中野好夫先生が亡くなられました。（死んでもよい人はなかなか死なないで）。

市川市　芳賀　守

いつもたのしく読ませていただいています。私はかくれた河上先生のファンですから、先生に関するものであれば、すべてたのしみとなります。

東京都　T　氏

戦後読んだ自叙伝によって河上先生を知り、先生の純粋さにひかれました。学があり、地位、名誉がある人が、それを捨てて真理探求のため「実践」することを尊敬します。それに引き換え何もしない我が身が恥かしい限りです。

袋井市　小　池　安　吉

戦後〝自叙伝に感動してこの道に入った私は〝野坂かえる〟の詩と〝たどりつき…〟の和歌を自室にかざり、朝夕ながめて自らをいましめている人間です。死ぬまで会員でありたいし、会報を読みつづけたいと思っています。

東京都　渡　辺　達　也

三八年ぶりに河上肇「資本論入門」（上）全集続2を読んでいます。先に理解できなかった点もわかるようになり、先生の名訳と独得（特？）の文章にひかれている現在であります。塩田庄兵衛編『河上肇「貧乏物語」の世界』『河上肇「自叙伝」の世界』と読みながら、先生の人格と学問に一歩でも近付きたいと思うこのごろであります。

北九州市　山　上　繁　喜

会報、大変おもしろく参考になっています。河上先生の〝自叙伝〟を学生の頃、深い感銘をもって読みました。全集を購入してまた読みなおそうかと思っています。

大館市　佐　藤　力　美

極力と斗った河上肇の意義が今後ますます問われると思います。

高山市　池之端　甚　衛

河上博士のご高風を敬仰いたしております。一六号、杉原先生の講演、一海先生の橋本峰雄師を悼む。一八号脇先生の郷里における河上先生、感銘深く読みました。

徳島市　三村文一

総会出席（予定）者の通信、会員通信、編集後記までつぶさに読ませていただきました。河上塾という樹が幹を枝を、そして根を張り、いろいろのところ、いろんな人たちに影響を与え合っていることを痛感しています。

田川市　角銅立身

（三）総会のこと

初めての参会で、知人も一人もなく、すこし心さみしい気もしました。皆さんは大体顔見知りでしょうが、私にはせめて自己紹介でもなんでも、顔と名前ぐらいは知りたいと思いました。

高槻市　紀平龍雄

総会の発言は指名だけでなく、希望者にしてもらうことにし、一人の発表を二、三分にして、なるべく多数に発言してもらうようにして下さい。

豊中市　井関安治

昨年の総会はよんどころない事状（情？）があって欠席しましたが、今年は万障を押して出席しようと今から準備しております。

伊那市　北原邁

事務局より

1.四〇代の方と、八〇代の方とから似たようなご意見があります。

2.総会のすすめ方について改善方法を相談しましょう。結果、改善となるか改悪となるかの自信はありませんが…。

制約条件について

Ⅰ、六〇名の方が総会にご出席になると仮定します。

Ⅱ、お一人、二、三分といっても、この際ぜひお話しを伺っておきたき珍しい方のご出席も必ず数名はあるようです。いま聞いておかないと未来永劫聞けないのではないか？。千載一遇のチャンスだという感じを持つこともしばしばです。

Ⅲ、お一人、二、三分といっても、五分は考えて置かないと会の進行は不安になります。

Ⅳ、せめて一〇分はお話しを伺いたい方が一〇人で一〇〇分。自己紹介の方が五分で、五〇人として二

五〇分。合計して三五〇分、時間に直すと五時間五〇分。

V、一一時開始ですが、法要と墓参の後、会場にご着席いただくのですが、その前にトイレに行かれたり、事務局も会計と遅刻の方との応待、配膳とてんてこ舞いで、会場でのお話しを伺うのは一二時四〇分乃至午後一時からとなります。

VI、京の秋は冷えます。また遠方からお見えの方はお帰りの時間があります。

VII、どなたか講師に来ていただいて、じっくりといいお話しも伺いたい。

VIII、午後一時に始めて、七時五〇分に終了という計算になります。

IX、終了は午後四時か、おそくとも四時半にしないと、ご迷惑になる方々が多いように感じます。

X、計算上、三時間二〇分のぶんは何かを犠牲にせざるを得ません。何を犠牲にすべきか？全き意見の一致は存在するでしょうか？

XI、いずれにしても早急に相談して対策を考えたいと存じます。

こんな短歌を書いて下さった方があります。

河上峯　追悼の座に坐しており
闘士も老いて他愛なく食む

どうかお気軽にご参加下さい。

（四）講演など

八四年総会は川勝さん、宇都宮さんのご出席で大変有意義な総会でした。「全集」二八巻、小生の研究室で仲々見ごたえのあるポジションを占めています。これから若い人を誘って、その認識を深めさせるとともに、記念会への入会をすすめるつもりです。また平和運動も小生なりに進めたいと念願しています。

大阪市　秋本育夫

眼の手術に始まって老化部門の手入れで、入・退院を繰り返し、昨年の総会は残念ながら出席出来ず、川勝伝さんや宇都宮徳馬さんの得難いお話を聞くことが出来ませんでした。陽気と共に健康も取り戻せそうですが、また、出席させていただきます。

東京都　白水実

宇都宮、川勝両先生を始め、河上先生の影響を受けた方々が、いろいろ多方面な活動をしているのを知り教えられました。七〇～八〇才代の人が多いようですが、もっと若い人達が入会してくると会も活発になるのだがと思います。終戦の年、二〇才で第二貧乏物語を読んで感激した小生も六〇才ですから、お元気で頑張って下さい。

都城市　小野綜一郎

川島、宇都宮両先生の講演、あらためてかみしめています。

堺市　小田正大

川勝兄のお話、青春の日ともに学んだ恩師や友のあれこれを偲んでいます。宇都宮君にもお会いしたかったのですが、病床で残念でした。

京都市　田村敬男

（五）学問と人と

日比憲一氏の訃報がのっておりますが、河上肇編、マルキシズム叢書、一三の『俗流経済学の批判―剰余価値学説史第三巻第七章の抜粋―』は氏が姜美慶の筆名で邦訳しております。私はそのことを氏に書面で質問して、たしかにそうであるとのご返事をいただきました。

西宮市　杉原四郎

大橋隆憲著、『日本の統計学』六二頁一〇行、「財部静治は統計学を新渡戸稲造の指導によって研究したが」の一行は、大橋教授の死没で確かめ難いけれど、おそらく「統計の理論及び方法」という鳥取県統計講習会筆記の誤用であろうと思われる。新渡戸稲造と京都大学法学部、財部静治、神戸正雄先生との関連を調べています。

広島市　青盛和雄

小生、戦前の農業問題（農業理論、資本主義論争を含めて）を研究しているものですが、河上肇の人と学問、思想にも関心をもっており『全集』を購入し、ボツボツ読んでおります。

仙台市　大和田寛

私は二一年に大学を卒業したとき『河上肇を中心とした日本資本主義発達の社会学的考察』という一二万語の論文を書いて卒業し、その後日本農民組合の書記局長となり、後に、日本社会党の書記局員、そして四七年から国会に出ています。河上先生とは全く直接の関係はありませんが先生の（判読不明）に私は感激しております。

土浦市　竹内猛

河上先生のお墓のある京都市鹿ケ谷の法然院は前住職の橋本峰雄さんと親しかったので、よく行って河上先生の墓前には必ずぬかずいて来ました。

和泉市　丸島誠

（六）会の方向について

過去を語るのでなく、前向きに新しい意見がほしい。

大阪市　立石　一

。過去を振り返えるだけでなく、河上先生の仕残した事業を将来に向って展開したい。何事も亜流たるなかれをモットーとしたい。

。法然院での総会は待ち遠しいくらい、どの学会よりも意義が深くかつ楽しい。

。河上精神（義の精神）を活かすこと、これほど今の世に大事なことはない。

東京都　佐藤克己

会員を増やしたいと思います。法然院の年一度の法要と集りが楽しく、清らかな雰囲気が何ともいえません。

堺市　広岡正次

河上記念会が先生の人格、業績を讃え、回想にふけるだけでなく、若い世代への伝達をはかることに事業の力点を移されるように希望します。全集刊行はまことによろこばしい次第ですが、誰でもが容易に入手できるような形での主著の刊行、およびその解説、評論よりもむしろ簡潔、平明な註解を付すことが必要、有益であろうと思います。一人でも多くの日本人、特に若い人々が直接先生の著作にふれることを切願します。

和歌山市　竹中　寧

総会に参加するようになり、未だ三年余。講師は勿論、出席者のお話し、大変感銘を受けておりますが、若い人が少いのは残念です。京都は大学の多い町、各大学の教授達にもっと若い会員の勧誘に努力していただきたいと存じます。現状では旧制高校の同窓会同様に数年先が危惧されます。

大阪市　佐田季男

"八〇年代と河上肇の意義"について、とくに若い人の文章を期待したい。もう一つは河上を個人的に知る年輩の方の記録を感懐的に残すように努めてほしい。"私と河上肇"と題するエッセイを会員全員に執筆願うとよい。

高松市　山崎　怜

青壮年層の発言寄稿をおのせ下さい。

名古屋市　土屋和夫

広く呼びかけたらもっと会員がふ

えると思います。

山口市　河村敏雄

様々の考え方の人が、自由に語れるというところがいいと思います。自由に語れることをやめさせようという力には、だんとつとした態度が貫ければそれが一番いいと思っています。そういう力を今は大切にせねばと思います。

福島県南会津郡　鈴木元夫

「河上肇全集」完結の機会が最後と思う。学生層、二〇～三〇才代の会員加入を岩波月報にでもPRすべし。

京都市　田中真三郎

昨今の内外の核戦争阻止、核兵器廃絶の運動に関心を持ち少しでも協力したいです。

姫路市　片山卓二

今、核兵器全面禁止、廃絶の署名運動が提唱されていますが、これは人類の生存を維持するための重要な署名なので、記念会においても、若干の力をそのために傾けて下さるようお願いいたします。

京都市　細井友晋

(七)　会報のことども

岩波書店の米浜泰英氏の続稿をぜひとも掲載方お願いします。

吹田市　山下肇

一七号所載の米浜さんの「河上肇全集編集室日記」の続編をぜひとも、次号にでもご掲載下さるようお願いします。

京都市　小林義治

すごい字のあやまりだらけ、文法のあやまり、たとえば、P2明快を明解。P23満中除を満中院。をご注意。

京都府　T氏

事務局より

ご注意ありがとう。気をつけているのですが、無学のせいと、専門外の片手間ボランティアなのでボカを出します。ただし、原文の自己流解釈で訂正したりはせず、詩の言葉のように受取って、再現に努めております。ただていねい語は簡略な言い方に書き換えております。今後、ご注意をいただいて、正誤表を掲載するように対策いたします。

「会報」の通信欄には、私信を、

ご本人の了解を得ないで公表しておられるものがあるように感じますが、もしそうなら、それはプライバシの侵害で、反対です。貴会への通信が「会報、通信欄」への投稿であるか、ないかを区別すべきです。とくに入退会や会費に関する事務上の私信の掲載は疑問と思います。「会報」はもっとも薄くてもよいですから、中味はすべて読んで有益なものに限定されるよう希望します。

N氏

事務局より

通信欄への掲載はご本人の了解を得ていません。ご本人より、掲載しないようにとただし書きのある場合などは掲載しないことにしています。プライバシの侵害だとの抗議を受けてからでは手遅れなので、心すべきことに思われます。

いまの事務局の力では、通信欄への掲載の前に、ご本人への了解の手続きを取ることが出来ません。「通信欄へ掲載してよろしい」という許諾付き通信はいただいたことがありませんので、プライバシ問題について正論（と思われるもの）に従うとすれば、通信欄は全廃せねばなりません。それは多くの会員の方々と共に、さびしいことと、私は思います。

対策

1. さまざまな受取り方の可能性があるけれども、事務局で常識的に判断して、心配なものは掲載を見合わせることとし、通信欄がやせるのは、止むを得ない。
2. 会員の方々に「特に掲載拒絶を表明されない場合は掲載を許諾されたものとみなす。」ことをご了解いただく。
3. 名誉き損などのおそれのある場合は、個人名を記載しないこととして、トラブルを少くするが、自由な意見の開陳の場とすることに努める。

いますぐは実行出来ないことですが、

対策4. 事務局を強化して、つまり腰弁で奉仕して下さる責任感のある方に事務局に入っていただいて、トラブルを防ぐ事務処理をしていただく。

なお〝有益〟かどうかの判断は、ひとに押し付けない会報でありたいと考えております。

本会々報は「会員全体の会報」の趣旨が徹底しているようで結構です。退会者の通信まで掲載していることも。杉原代表の短信も同じように掲載されていることもよい気持です。民主的運営に徹していただきたい。

徳山市　脇　英夫

事務局より

退会の方々の通信欄掲載は今号より中止いたします。プライバシのこともあって、事務局でも異論があります。懐しい方の計音を会報に見ることもなくなるようです。

一昨年より年三回発行と精力的に出していただき内容も充実し、嬉しいことです。総会のお話しも詳しく再生しているので、当日、聞き洩らしたこともよくわかり助かります。たまって来た会報は二〇号あるいは二五号を区切りとして紐綴じしたいと思いますので（その都度いただいた資料と共に）右側余白をいまのままあけて置いて下さい。

西宮市　富田健一

事務局より

二〇号を区切りとさせていただきます。整理の便宜は考えさせていただいております。

会報に河上先生の著作の抄録あるいは解説のようなものを続きもので載せたらと思います。

伊丹市　中村欽吾

局員さん、実務もキッチリ。物わかりもよさそうで、たのもしいです。その調子で…。

京都市　稲田素臣

以前にくらべ内容充実しつつあり。なお随想などをのせていただければ有難し。

西宮市　色川幸太郎

お蔭で河上先生の事績のみならず、そのご縁で多くの先生方の言説に接し得てありがたく存じております。

茨木市　大西公哉

テープを掘り起し文章化するのが大変ということを私も最近体験し、毎回編集の方のご苦労がよくわかりました。会員の皆様、心は若々しくても、私を含め（若い方と思いますが）体の無理はきかなくなりつつあるので、ますますのご自愛を祈ります。

宝塚市　古池健吉

編集、発行に至るまでのご苦労はよく解りますが、年2回の会報の間がなんとも永く感じられ淋しく思います。月報とまでいかずとも、なんとか季報に準ずるようなものが発行出来ないものでしょうか。

防府市　上田隆

事務局（個人的見解、大久保）より

1. 同感です。

2. 四季報（現在は年三回）にしたいですね。

ネックとなっている条件は

I、編集日程に合うように原稿が集まらない。

II、事務局が非力で、現在でもおくれおくれしている。

ということで、個人的に東京河上会の事務局の方に、交替編集を持ちかけたことがあったのですが、まとまりませんでした。

原稿集め―編集を、例えば西南日本でやっていただければ、いまの状態ならば、会員にしっかり支えられて財政的余力もありますし、会報の発送業務は、家内と子供達に手伝わせることで、お引受け出来ると、考えております。

会報は地方在住者の立場からいえば、唯一の灯ですので、今後ともよろしく。

山口県　細迫朝夫

一九号の川勝、宇都宮両氏の記事はよみごたえがあり、教えられました。会報のどこかに法然院の住所を記しておいて下さい。上京のときに参詣したいと思います。できればバス停も。

熊本市　小谷正守

事務局より

二一号（本号）にのると思います。

先般、はじめて、河上墓参会に参加しました。法然院の環境、全く先生にふさわしく、心洗われる思いがしました。ただ、ある著名人が、長々と自己宣伝やら自分の政治的立場をしゃべっているのは、はなはだ河上祭には場違いの感がありました。先生は存命中、最後まで、やや控え目で、謙虚な学者らしい姿勢を貫いたと思います。そして不屈の革命的志向をもっていたと思います。先生の弟子等がゴーマンで自己顕示欲の強いのは全くいただけません。司会のあり方も一考を要すとおもいました。苦言多謝

東京都　K氏

東北に住み出席できない私にとって会報の写真は楽しいです。墓石のうしろ姿を今しみじみ見ました。法然院の座敷の床の間の掛軸の南無阿弥陀佛とその前の先生（？）を見て笑いがとまりません。即身成仏を思ったりして。（失礼）表紙の法然院の石段には八年前（息子立命在学中）の私の足あとを見ています。講演は市販（販？）の著書を読むのとはちがってお人柄の生地がそのままみえて実に楽しいです。

東北から拍手

会員の便りに河上先生に私淑するすばらしい仲間であることを感じます。

お盛の重箱の中の京の味はどんなものかと想像しております。これも写真のおかげです。

横手市　和泉とく

河上先生という存在がどうも風化しがちな今日、この会の存続の意義が益々重く感ぜられます。年一回だけでなく会合の機会を今少し増やしていただきたいと思います。たとえ小グループでもよいですから。

豊中市　後藤嘉七

事務局より

世話人会でも話題になりました。私自身は東京都の田舎に住んでおりまして、総会でも当日以外は何の手伝いもしておりません。

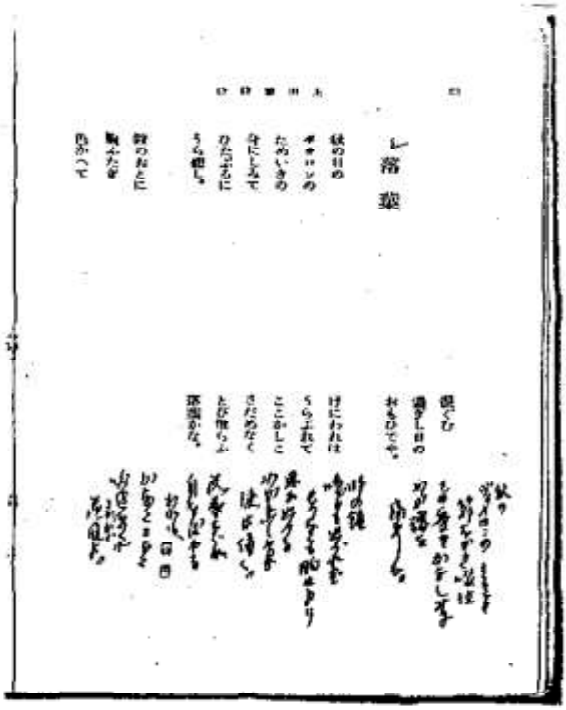
会を開くと、それなりに準備と後始末の手間がかかります。講師の方に失礼にならぬ程度の人あつめもせねばなりません。会が終るまで気苦労の連続ですが、そのお世話をして下さる方がお見えなら、可能と考えます。

資料『上田敏詩抄』

（岩波文庫）

この夏、杉原四郎先生（世話人代表）を通じて羽村家より一冊の岩波文庫が京大河上文庫に寄託される。この文庫本は河上が獄中で読んだ『上田敏詩抄』である。小雪刑務所図書交付票の貼付がある本書にはかなりの書き込みがある。河上の筆跡をたどっていき、ヴェルレエヌの有名な「落葉」（私の世代の愛誦詩）に別の訳詩が書き込まれていた（写真参照）。上田訳を口ずさんでいた私には少しぎこちない。河上訳が、と興奮する。昭和一二年二月六日の獄中日記に「『上田敏詩抄』なかなかおもしろし。」とある。

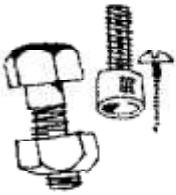
出獄の日を指折り数える河上の心境にこの「詩抄」が如何に応じたか、日記では一か月後の三月八日に「春が来た春が来た／……」（偶成）の詩を生むと、資料屋の私の勝手な解釈ですました。が河上訳の方は、全集第26巻の書簡を開く。昭和一三年一二月二一日畑田朝治宛に上田敏訳の「落葉」がはがきに書いて送られる。そして同年同月、石川脚二宛



に河上訳と私が興奮した「落葉」が堀口大学訳として写され、送られているではないか。再び資料屋の不勉強を暴露するという結果となった。

この詩抄には、河上が気に入った（？）詩の頭にチェック印が付されており、言葉の意味が鉛筆で書き込まれている。しかし先きの訳詩もこの鉛筆書きも獄中でなされたとは確定することはできない。

（細川元雄記）



アンケート集計報告

表一

発送	一、一〇六通
回答	三四〇通
回答率	三一%

コメント

回答率、三一%は高い回答率とは思われません。会と会員との結び付きがゆるやかなせいかと判断されます。集計している私自身がいつ会員になったかもわからないのですから、無理もないと言うべきでしょうか。

社会主義とか、求道とかいう言葉が、そらぞらしく時代錯誤のように受取られそうな風潮の中で、故人を中心とする河上肇記念会のような会は存続し難いのかも知れません。

近視眼的な私的な利害に関心が向って、射程の大きい社会的なことを忘れた風な行動が拡がり、それを基礎に一部の人達の利益のために人類史は滅亡へと歩を速めている。人々の指向が人類存続の方向にかわるのは、どんなきっかけであろうか？河上肇記念会は、その時どんな役割を果し得るのか？私の友人の多くはせせら笑います。

表二

年令区分	人数	%
九〇代	二	一
八〇代	二六	一〇
七〇代	六八	二五
六〇代	六一	二二
五〇代	七〇	二六
四〇代	二四	九
三〇代	一七	六
二〇代	二	一
一〇代	〇	〇
計	二七〇	一〇〇

回答者の中で四五人の方が退会を申し出られました。そのうち物故なさった方が五人いらっしゃいます。退会者を除いた二九五人の中に、年令欄をご記入にならなかった方が二五人います。差引二七〇人の方々について、

年令構成をかりに、一〇代、二〇代、三〇代という風に区切ってグループわけしますと表二になります。

河上さんに直接影響を受ける可能性のあった年代を、かりに七六才以上とすると、七六才を含むそれ以上の方は二七〇人中五七人で二一%、七五を含むそれ以下の方々は二一三人で七九%となります。

コメント2

この統計は部分的なもので、バイアスのない構成を示すとは断定出来ません。しかしまた、記念会の年令構成について、よりバイアスの少い推定もありません。より安心出来る統計の出来るまでは、これを事実として事実に立脚した考を展開したいものです。

五〇代から七〇代で七四%、四〇代以下一六%八〇代以上一一%です。個人的には、二〇〜四〇代中心の会であって欲しいと願っていますので、新興宗教が若者の心を捉えるようには河上蠟が若者の心を魅き付けないのは何故か？ぜひ解明をお願いしたいものです。

表三

区分	回答数	%
1. だいたい全部読んでいる	二一〇	七一
2. 拾い読みする	七八	二六
3. 全然読まない	二	一
4. 自分は読まないが誰かに読ませる	一	一
5. その他	三	一
6. 記載なし	二	一
計	二九六	一〇〇

コメント3

1. 印を付けられた方々で、精読していると付記された方が多数いらっしゃいました。こういう会報ですから、会員の方々の多くの投稿をお願いします。会員全員に、〝河上蠟と私〟という題で執筆してもらったらというコメントがありました。そんな特集号が出せたら、どんなに素晴らしいことでしょうか。

表四

区分	回答数	%
1. 読みつづけたい	二四一	八二
2. たまに読みたい	三八	一三
3. 読まないし、誰かに読んでもらおうとも思わない	一	—
4. 送られて来て迷惑だ	一	—
5. その他	九	三
6. 記載なし	六	二
計	二九六	一〇〇

コメント4

二一号からは、活字と組み方の面で読み易くするよう計画されています。実際に読んでおられる方の数よりも、読みつづけたい方のほうが一〇%多くなっています。そうあって欲しいと望みます。

アンケートありがとうございました。

（事務局　大久保雅摂）

編集後記

表紙デザインなど大久保事務局長のご努力により、ハンディで、親しみ、読み易い雑誌へと本誌が近ずいたと編集子は思います。

ご投稿下さった四篇のうち三篇と当会記念にと依頼し、書いて下さった一篇とを載せ、充実した新装会報の第一号として皆さんに送ることができたと喜んでおります。

河上全集編集の米浜さんに本誌の先輩の「東京河上会会報」の分析・ご批判をいただきました。会員ご希望の「編集室日誌」的な面に加えて、東西ともの河上会にとっての大切な問題提起をして下さいました。すでに本誌の会員通信欄にも同様のことを散見しますので、本誌上で議論が続けられることを願っています。

「河上肇と私」で全会員のご投稿をという提起に編集子は喜んで賛同します。

いずれも四〇〇字詰原稿用紙五枚以内にてご投稿を願います。次回締切日は本年十一月末日といたします。なお送付先は事務局まで。

（H生）

入会のすすめ

河上肇記念会は、関西を中心として正式に発足して満十二年になります。毎年秋には、河上の墓前に集まり、法然院にて法要を営み、会の総会を開いております。会員の資格は会則にある通り、河上先生に学び、先生を知ろうとする人びとです。是非ご入会をおすすめします。

会員の皆さまには友人、知人にこの会をご紹介下さい。

会報（回覧雑誌）

河上肇記念会
会　則

一、この会は河上肇記念会と称し、大阪市（または京都市）に事務所を置く。

二、この会は、河上肇先生の人格とその業績を讃え、これを広く、かつ永く伝えるための研究ならびに事業を行う。

三、河上肇先生を敬慕し、先生に学び、先生を知ろうとする人びとを会員とし、いかなる資格ならびに政治的立場を問わない。

四、毎年一回総会を京都で開き、その他随時集会および事業を行う。

五、この会の会友および世話人は別の定めによって選び、総会において承認をえる。

世話人代表はこの会を代表し、世話人中の事務局担当が事務を執行する。

六、この会の経費は、会費ならびに寄付金をもってあてる。

会費は年額三〇〇〇円とする。

七、この会則の改廃は総会の議決による。

転居通知のお願い

転居、住居表示変更などのあった場合は
事務局へご一報下さい。

〒五四二　大阪市南区鳥ノ内一丁三〇一九
（丸善石油ビル）　千代田商事株式会社内
河上肇記念会

貧乏物語　初版

〒542
大阪市南区鳥ノ内一丁三〇一九（丸善石油ビル）
千代田商事内　河上肇記念会
電話　（〇六）二五一三六九六
振替口座　大阪　三一三一九五

京都（きょう）に〝煙〟あり

1965年　創刊　只今49号

戦前日本プロレタリア文化運動の生き残り10名（72～82才）が出している異色の同人誌、埋れた青春像の発掘を柱に詩・歌・小説・エッセイもあり、各地、各界、各層からの便りを〝声〟欄に収めているのも特色

A5判120頁　頒価500円　〒200円

「煙」　同人社
京都市中京区西ノ京藤ノ木町11の24
兒玉　誠方
電話　京都（075）811－7646番
振替　京都　2－15653番